

古典の中の
愛と怨

生方たつる



著者紹介 うぶかた たつゑ

明治38年2月、伊勢に生まれる。大正15年3月、日本女子大学卒業。昭和33年「白い風の中で」で詩歌部門の読売文学賞受賞。日本歌人クラブ幹事、女人短歌会常任幹事。「額田姫王」「新短歌教室」「王朝の恋歌」など著書多数。

古典こてんの中なかの愛あいと怨うらみ

著者——生方うぶかたたつゑ

編集人——守屋健郎

発行人——大原規男

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 千一〇〇

大阪市北区野崎町八の一〇 千五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一 千八〇二

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——協和製本株式会社

第一刷——昭和五十七年二月十八日

定価——九八〇円

©, 1982 Tatsue Ubukata

0095-703230-8715

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

古典の中の愛と怨み 目次

第一章 額田姫王と大津皇子 7

錦の小蛇 9

呼び寄せる歴史 20

古代の残照 24

鎮魂譜としての「大津皇子」 29

秀れたものに来る悲劇 34

ライバルの悲劇 42

今日のみみてや 47

茜さす恋 50

紫匂う 56

第二章 万葉の歌人 63

万葉の女流歌人像 65

大伴家持をめぐる女性たち 77

第三章 平安時代の物語 87

愛と修羅 89

源氏の女性たち 103

情感と理智への移行 112

二人の女の間 118

第四章 能 123

愛と怨執 125

あとがき 195

装丁 宮崎順二

古典の中の愛と怨み

第一章 額田姬王と大津皇子

錦の小蛇

魔性をもったものとして、まず私に注入されてきたのは、出雲の大蛇のお嘶話であった。お嘶話ではなく「神話」と言うべきであろうか。

つぎつぎと美女をのみこんでしまうという大蛇とはどのようにすさまじいものであろうか。人間には具備することのない超能力の生きものとして、私はしたたか大蛇に畏怖の念を抱いてきたのであった。

ひよわな幼児を療養かたがた海辺の町に住んだが、その土地に祭ってあった神様が、須佐之男命であったから、そこへお詣りするたびに、私はこの神様は勇気のある神である話をきき、尊敬をもった。

「大蛇を一気に切りさかれましたらな、カッチリと固い音がしやりましたんや。尾っぽのあたりに剣が入ってござったのやそうな。それがむらくもの剣のはじまり……」

剣をのんでいた大蛇の魔性は、言うまでもなく、私の中で神格化されていった。

日本武尊が東征の途中、焼津で賊にだまされて、あやうく火中に焼死する運命にみちびかれた

時、この剣で草を薙ぎはらわれて危機を脱出されたという物語に至るまで、神力の發揮の原動力は「蛇」という超人間的な魔力をもったものの力とかね合わされているのであった。

いつのまにか蛇は精霊的なものとして私をゆりはじめたのであった。

『古事記』には大国主命が悪い八十神たちのたくらみによって、さまざまな危険にさらされ、いくたびか死に、いくたびか蘇生する物語があるけれど、この時、須佐之男命は大国主命の勇気のためそうとして、うようよと蛇のたむろする^{あたぐら}害に寝所をきめて、そこで寝よと命令される。

大国主命は素直にその害に入ろうとすると、愛する須世理姫がひそかにささやかれ、領巾^{ひん}を渡される。

「この領巾をお振りになれば蛇は敬遠して近よることはございません」

大国主命は無気味なほど蛇のたむろする害に入り、この領巾をふる。一夜は無事にすぎ領巾をふった大国主命は無事に目ざめの時がもてた。

今にして思えば、須世理姫の手わたされた領巾は、「たまをよぶ神聖な幣^{しで}」の役目をもった筈である。この領巾をふられたときの「たまよびの霊力」は超能力をもった蛇なればこそ、何事もなく鎮められたのかもしれない。いわば領巾は蛇の精霊を抑えたということであった。

須佐之男命は大蛇を退治されただけの蛮勇者であったから、この位のたまだめしは課されたのもあろう。

「力を試す」

という条件には、容赦ない苛酷かこくさが必要とされた。

大國主命のやさしい氣質とは対照的である須佐之男命は、すでに生馬の皮さえはいで捨てた神様である。

この荒い神様の物語にどうしていつも「蛇体」が添っているのでしょうか。

土蔵のどことも知れず住みついている蛇がときたま屋敷の中へ顔を出すことがあった。

母は若い雇人たちに、決してその蛇を殺してはならない。家の主なのだ、といましめていたのを、私はいくたびも見聞きして育った。

お嘶話のような精霊信仰がくらしの一つの規制として母を支配していたのであろうか。

「松さんの家では、大きい蛇が日向にいるのを見つけていじめ殺してしまってから、あの家は没落していきなされた」

とも言った。

「家の守り主」ともいわれる蛇には、昔から精霊にかかわる何かが備わっていたのであろう。

大國主命の蛇の寝所の物語からは、はるかに時代が下るけれど、私の記憶をゆすぶる蛇の物語があるのは全く不思議でもある。

時は垂仁天皇のころ、

『日本書紀』によれば、

「四年秋九月丙戌朔戊申、皇后の母はらからの兄いもうせ、狭穗彦王さほひこ、謀みかどかたふけむとはかりて、反く、社稷を危めむと欲ふ。

因りて皇后の燕居を伺ひて曰く、汝、兄と夫と孰れか愛しき。是に皇后、問ふ意趣を知しめさずして、輒ち對へて曰く、兄ぞ愛し」とある。

垂仁天皇の皇后狹穗姫は、兄の狹穗彦から、夫がすぎなのか、兄がすぎなのか、どちらだ、と糾され、皇后は勿論天皇以上に大切な方はないと思つたけれど、血を分けた兄にそのことを率直に告げることを除けた。

「勿論兄の方が愛しい」

と心と裏腹な言葉が、ふと狹穗姫の口からすべり出す。

狹穗彦の問いの内容そのものが無惨な運命をみちびき出す胚子を充分もっている。

やがて狹穗姫は、兄から短刀を渡され、兄を愛しいとするならば、ためらわず天皇を殺しまつれ。そのあと兄と汝とが天下を治める。何と面白いことではないか、と謀略を打ち明けられる。

皇后は兄から短刀をうけとり、悩みの幾日かが過ぎたある日、

「天皇皇后の膝を枕にして昼寝ませり。是に皇后既に成げたまふ事無く空しく思はく、兄王の謀る所は適是時なり。即ち涙流りて帝面に落つ。天皇則ち寤きて皇后に語りて曰く、朕今日夢みらく、錦色なる小蛇、朕が頸に繞る。復た大雨狹穗より発り来て面を濡らすとみつる。是れ何の祥ならむ」

と書紀にしろされている。兄から渡された短刀をふりかざして天皇を殺しまつろうとしたけれ

ど、愛しまつる天皇を刺すことが出来ず、刀を持つ手が震え、思いなおしてもなお、手を下すことが不可能であつた。兄の言にしたがえば愛する天皇をあやめまつらねばならず、このままならば兄にそむく。はては兄は賊の汚名を着る結果にもなりかねない。万感むねに充つ、といった皇后は、ついに天皇の顔の上に、はらはらと涙をこぼしてしまわれる。その涙で目をさまされた天皇は、息苦しかった夢から開放される。天皇は、頸をまいていた錦色の小蛇のこと、雨のふりそそぐ夢のことなど話されるのであつた。

錦色の小蛇は、言うまでもなく皇后狭穗姫の女の精霊の変化であつた。天皇をあやめようとして刀を握つた瞬間、すでに皇后は皇后ならざる位置にすべり出していて、その怨念だけが天皇の頸にまきついていったのであらう。

「蛇は女の執念の変化だ」

といわれるようになったのは、ずっと時代が下ってからであらうけれど、垂仁天皇の時代にすでに皇后が錦の小蛇になっていたことは興味ふかい。

不思議がる天皇の問いに答えた皇后は、ありのままの報告をする。狭穗彦は自然賊とよばれる立場になり、やがて稲城をめぐらせて戦う準備がなされる。

天皇と兄との中に立った狭穗姫は、自分のために戦いが起きたことを嘆き、妊娠中のわが身を兄の稲城の中へ走り入れ、そこで出産する。

「天皇のお子に相違ないと思召すならばお受けとり下さいませ」

と御子を稻城の外にお出しになった。天皇は愛する皇后を案じられ、子供を引きとると同時に妃をもつれ出せよ、と命じられた。強力がえらばれ、皇后をもつれ出そうとして髪を引つ張ると、皇后はあらかじめ髪を剃られていて、毛髪だけが引きとられる。次に衣を手にかけると、着衣はぼろぼろに切り裂かれていて、皇后のからだからはぎとれるだけであつた。皇后は謀叛の兄をもつた妹の罪のつぐないとして、火のつけられた稻城の中の火炎に焼かれて終わられるのである。悲劇の運命を背負われた皇后が、火炎の中で、あるいは錦色の蛇に化していったであらうか。

あるいは、「錦の小蛇」がついに精霊となることを放棄して、稻城とともに焼け果てたのである。かく思い至つてくると、この苛酷な運命ゆえに、皇后の錦の小蛇は殊の外美しい。

もう一つ考えられることは、人間殺戮の血なまぐさい事件の予知として、錦の小蛇が出現したということ、すなわち、「天皇は神にしませば」といった時代の物語として、如何にもやさしい皇后の人間像ともなる。

能に「三輪」という曲がある。

筋がきをかくと、三輪山かげにすむ玄賓という僧都のもとへ、毎日櫛をもって水を汲んでくる里女があつた。玄賓はある日、女に名をたずねようと思うが、その女が秋の夜寒に玄賓の衣をかりて出立つとき、三輪明神の歌など口ずさみつつ失せる。前シテは里女であるが後シテは三輪明神である。